

子どもの「社会力」を育てる場、育て方

— 水海道小学校新聞部の活動から考える —

かつて多くの学校で取り組まれていた新聞部、購買部、貯金部、保健部等々の自治活動。そこには、今、学校教育の課題となっている社会への関心・視点、リーダーシップ、チームワーク、企画力、実践力といった社会的能力、人間能力を育てる場、活動のあり方を考えるための大きなヒントがある。

1. B4 ガリ版両面刷りの学校新聞

水海道小学校(茨城県常総市)には、昭和 26 年から 17 年間分の学校新聞が保存されている。次ページに掲載したのはそのうちの 1 枚、『やまびこ新聞』54 号(昭和 26 年 9 月発行)である。B4 版両面ガリ版刷り 1 枚の新聞の記事は、1 面にはトップが対日講和条約調印とそれに関する論説。つぎに、その年に発生した水海道地域での感染症のニュースなどの地域社会の問題。学校内の問題として、NHK ラジオの唱歌コンクールの出場選手決定と、ピアノ修繕についての記事。2 面上段は、一町六か村のドッチボール大会への出場のニュースとローマ字学習コーナー。下段は「BUNGE I」という表題をつけた文芸欄で、児童の書いた日記を紹介し、読者に「皆も書いてみよう」と呼びかけている。作文や俳句、4 コマ漫画も掲載されている。国や地域社会、学校内の問題、学習、文化と豊かな紙面構成である。

号によって、学校行事の計画や報告、消防署や警察署、保健所からの情報、学校内での行動のしかたの問題など、さまざまな内容が取り上げられている。また文芸コーナーも笑い話、クイズ、創作物語などいろいろな工夫をしていることが読み取れる。新聞に対する要望等を受けつける投書箱も設置していることがわかる。

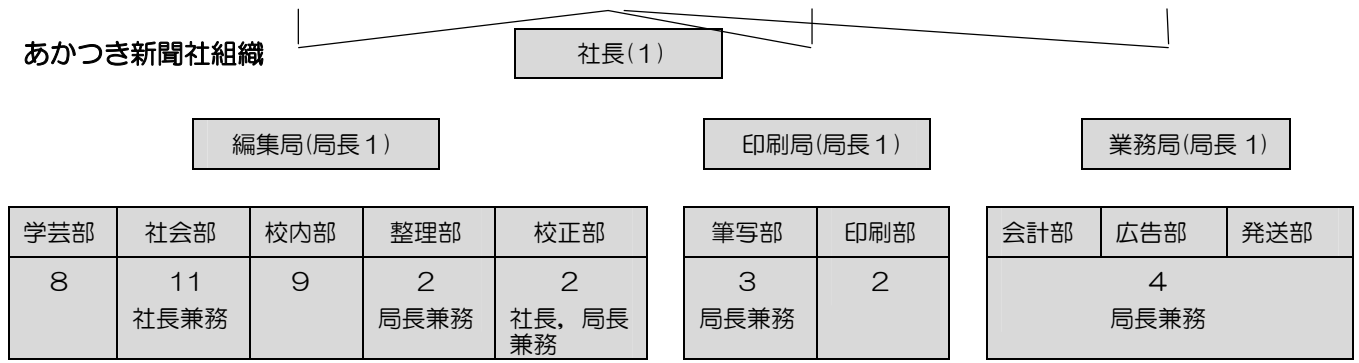
そして面白いのは 1 面中央の「小間物化粧品は〇〇店へ」とある欄。これは地域商店の広告である。実は、やまびこ新聞は右上隅の発行所欄にあるように、独立採算制の「やまびこ新聞社」が出した新聞なのである。

2. 活動は会社組織で

水海道小学校の新聞部には「やまびこ新聞社」「あかつき新聞社」の 2 つの新聞社があり、それぞれ原則として週 1 回発行、互いに販売部数を競っていた。新聞は有料*で販売、その売り上げと近所の店からの広告収入とで、発行の経費を賄っていたという。新聞部の活動が、会社の経営も考えるという場になっていたのである。販売部数は重要な経営の条件となり、2 社は新聞を面白くわかりやすいものにしようと工夫したという。(※昭和 26 年頃の値段は不明。昭和 38 年頃は 1 部 5 円。)

新聞社の組織は、あかつき新聞第 43 号(昭和 26 年 4 月発行)の記事によれば、下図のようにになっている。

あかつき新聞社組織



社員は4, 5, 6年で構成されていて3部局計39名。やまびこ新聞も同等の組織と考えられるので、約80名が新聞部で活動していたと思われる。昭和26年当時の水海道小の児童数は約1600人であったので、半数の800人が4年以上とみると、その約10%が新聞部に属して活動していたということだ。自治活動

新聞紀要

內社亮秀
校衛保
學新久井
小大荒
道心
所海人
行水也
登

對日講和條約

無事調印される

一、**フニシス**コノオ
 二、**ハウス**におい
 三、**テ**行かれた**対日議**
 四、**和**じようやく無事
 五、**に**九日ちよう印さ
 六、**れ**まじめた**日本は**
 七、**は**じめた**世界の国**
 八、**民**の仲入りをし
 九、**た**わけです**議和**
 十、**じ**ようせん成立す
 十一、**る**まかに**米國の**
 十二、**ア**マカーサー元す
 十三、**い**をばじめとして
 十四、**列**ス**特次**大勢
 十五、**の**人々のおほねよ
 十六、**う**により終戦後
 十七、**た**たかつて四日
 十八、**日**議和に吉田首相
 十九、**全**けいまはじめ二
 二十、**十**一名の全けんが

かにゆきまじりしス
 の村日講和令議に
 は五ニヶ國の國々
 があつまり議長に
 はアチリン國4長
 官かえらばれた
 をすめまはした
 この村日講和にち
 よう印しなかつた
 國は、リ連、チエ
 コ、ポーランドこ
 の三ヶ國です、こ
 の講和によつて
 の終つた日本は今
 までより苦しくな
 るといつています
 平和日本となり独
 立したけれど、も
 う物がありませ
 う物がいしやう金

社說

講和條約もうとう印されいよいよ日本も一人だちになりました。これに吉田にせしうも、言てゐるやうに、日本の大人も、小人も、立國に持つべきといつてゐたきもちではだです。ほく達の學校でも、學務委員會、中心にして、各部、各級、で學校委員會に協力して、ほく達の學校をよくし、これからの日本を、せおつて立つてゐる。日本をよきしたいものです。でも、みんなが齒を口にだけいて、實さいや、わつたきもちにならないうにしてほじいので、

物産品は
小間物
飯泉店へ
丸頭朝日町

は一千ドル百本で
 三十九大變金加
 たります。吉田
 にも、ちやうど
 ても、何やがうわ
 た、気持ちに、こ
 つめたい、こは
 びす。



八月廿二日赤城百四名余生

水海道保健所管内

水海道保けん所のくい
きの中今半の一日か
つら八日まこの云染病は
つきのとおりに発生しま
した。せきりばは四名
そのうち死者三ニ名
ちよチフス六名そのうち
ち死者二名
バラチフス十五名
デフテリヤ二名死者一
名
合計百二十七名
死者三五名
以上のとおりですかつ
きの通りになっています

ハミカ二百三十名
のうち死者四名
百にせき七五名
死者四名
ハイエン百七五名
死者七セ名
けつかく百七四名
心者五一名
トホネーム百四
名以上のとおりで
すなはせきりの
は大いには皆井
の七名その一つ
かゆはたけの
に

唱歌
選手
央
乙

坪によつて、所け、ウ
 シオコンタールの季節
 になり、学校卒業部では
 昨年の県校を、なまけ
 ぬよう来る九月にまけ
 クラブ員、その他人、器
 のけつ、文の二十名か
 今年の選挙となつて大
 いに活やくしてもちう
 云の二 白木さみ江
 五の二 北村えい子
 五の三 よこ田高子
 五の四 くり田幸子
 五の五 石塚のぼる
 とぼるえ子

五五 下皇平天公子
六の 一すまふきよき手
大久保亮三
株しずえ
小まけすえ
さうけん
岸のふく
青木いへ
落合十子
日と回文ナ
六の 三
六の 四
あつた
中の土台に
をかけ大
きり方
れんし
います

和たちの学校には大
 なグラニドピアノが
 りますこのきえニアノ
 をおあじました。音
 先生にきいた。ピアノ
 というものはどうい
 う一年に二回くらい
 おさなくては音がくる
 ってしまうそうです。
 うらした音をわめて音
 をおさします。ピアノ
 のゆのもよれてひとく
 なったのでこにこの
 音がなおります。
 この二の音は、
 ばいようです。新
 わるい所やなん
 糸のものをせたら
 紙にかいて五の二の
 にかいてあるやま
 こ新向社のと書はこ
 へれて下さい。

名のじゆんです。右
 道七人のうち死者七
 人です。
 かだれ曲はみなて仲よ
 く自由きよくはない。う
 のほとり地才予定は十
 月七日本校が会せは十
 十四日は県予せは会場
 は茨城会館でおこな
 われます。

ピ
 しゅうせん

の部は 10 程あり、どの部に入るかは原則は希望なので、年によって構成人数は必ずしも同じではないが、第 2 希望までとって人数を調整したので、大体はこのような人数構成で行われたと考えられる。

会社の組織は実際の新聞社に非常に近い。取材執筆は社会・校内、学芸の 3 つの部が行う。それぞれの部が視点を立てて取材し執筆活動をするようになっている。その活動の結果を集めて編集会議を行い、整理部が中心になって何をトップ記事とし見出しをどうするか決定、全体構成をする。その後、校正部でチェックし印刷局へまわす。筆写部でガリ版を切り、印刷となる。このような段取りであったことが想像できる。

「やまびこ」は毎週月曜、「あかつき」は毎週木曜発行で、発行後すぐさま次の取材・執筆にかかり、3 日目が編集会議、4 日目 5 日目で筆写・印刷をしたという。毎週は出せず 2 週間に 1 回になってしまったと社長が反省している年もあるが、平均して年 30 回ほどの新聞を発行している。40 人のチームが 2 つ、これだけの活動をしていくには、それぞれの会社の社長・局長のリーダーシップ、部局間の連絡、また部局内各部の活動とその連携がうまくいっていなければ成り立たない。

3. 学校間で行われていた新聞交換

やまびこ新聞 58 号では、水海道小の「やまびこ新聞」「あかつき新聞」が、茨城県内 50 数校が参加して行われた学校新聞コンクールで 1 位になったことを伝えている。同時に「やまびこ新聞は、全国の一流新聞になったので」全国各地の学校から新聞交換の希望があったと伝えている。当時、互いに新聞のレベルを上げようと、学校新聞に取り組んでいる学校間で新聞交換が行われていたことがわかる。

やまびこ新聞の 59 号では、新聞交換の相手校、櫻田プランで有名な東京の櫻田小学校の櫻田タイムスを紹介している。櫻田タイムスで出している 4 年以上対象の印刷新聞、3 年生以下のための壁新聞、全校で決まったことを書いて伝える黒板新聞の 3 種の新聞を紹介している。「印刷新聞は毎週土曜日に 220 部発行(有料)」「4 年以上の生徒の 73%も新聞をとっている」と競争意識も見えている。

4. 自治活動は、社会活動のシミュレーション

水海道小学校では、他に放送部、保健部、運動部、購買部、貯金部、保健部、整美部など 10 の部があり、いずれも児童が主体になって進められたという。放送部の朝昼の放送は児童に任せられていたし、運動部は運動会の計画から実施までを児童が取りしきり、日常的な用具の管理もしていた。保健部は、学校生活における衛生面の調査や啓蒙活動を行った。そうした各部の活動の様子*も、新聞記事の中から垣間見える。

この自治活動の様子は、映画『私たちの学校』（日本映画新社）『ハエのいない町』（岩波映画）で紹介されているが、社会をみる視点、調べ分析する能力、考えたことを表現する力、失敗を乗り越えそこから学ぶ力、少数意見を潰すことなく誰もが納得できるように意見をまとめていく力、計画を実践する力、共同する能力、分担とチームワーク、リーダーシップ、そうしたものを育てる場として機能していたことが実感できる。

5. 育てるものは「学力」でよいのか

今、教育の方向が「学力テスト」で測られる学力の向上を目指して動いている。しかし、それでよいのか。学力テストで測られるところのいわゆる「学力」は、子どもたちに本当の力をつけているのか。そもそも、教育は何のために行うのか。子どもにどのような力をつけて社会に送り出すべきなのか。またその力を育てるには、どのような学習活動をどのように組み立てたらよいのか。それをいま、我々は見直してみる必要があるのではないか。

社会を見る視点、調査力・企画力、実行力、リーダーシップにチームワーク。自治活動のあり方を研究し、そこに教科の学習をどう位置付けていくか、そうした方向の研究と実践がじっくりとなされる環境をつくっていたなら、世界トップレベルの人材育成ができていたのではないかと。めまぐるしく方針が変わる日本の教育行政だが、ここらで「社会に生きる人間の育成」に焦点を当て、じっくりとその教育のあり方を研究し、育てていく方向に舵を切ってもらいたい。

（矢口みどり）

JADEC ニュース 81 号（2010/7）より